クライアント

姫椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クライアント

【Ｎコード】
Ｎ９０５３Ｗ

【作者名】
姫椿

【あらすじ】
交わった世界。そこに現れた異分子は、はた迷惑な結果を巻き起こす。

プロローグ（前書き）

かなりの独自解釈や誤字脱字があると思われます。
目もあてられないミス等がありましたら連絡ください。

プロローグ

我思うゆえに我あり

有名な哲学者デカルトの一文である。

この言葉を、何かを考えているからこそ自分は存在しているという意味で捉えると、何も考えていないということは、そこに自分というものは存在していないのでは――と思う。

「だから俺はここに存在していないし、この状況は全てまやかしなんだ。」

まあ実際は、否定しているから疑っているこそ、そこに自分はあるという証明である――といった考えなのだが。

だからこそ、何も考えていないからそこに自我は自分は存在していない――というのは見当違いな暴論である。

よって周りの景色は消えないし、敵視も一向におさまることはない。

一方、そんな壁が背後である背水の陣な彼の周りを囲みこむ四人組。

その中のリーダーと思われる少女は、敵と認識している存在から決して照準を、そして目線をそらさず、口を開く。

「あなた……バカ？」

予想内過ぎる予想外の言葉に彼は思わず固まってしまう。

「……見るからに年下の頭でっかちに言われたくはないな。」

「なんですって！」

挑発になれていないのか、もしくは図星なのか、簡単に激高する短気な少女。そしてそれを宥める周りの三人。
おいおいこの程度で――と、思わず呆れて気が抜けてしまいそうになるが、この場から脱出するチャンスを逃す訳にはいかない。一瞬でも対象が自分という個を認識しなくなったその瞬間、この術式は完成する。

我思うゆえに我あり
有名な哲学者デカルトの一文である。
この言葉を、何かを考えているからこそ自分は存在しているという意味で捉えると、何も考えていないということは、そこに自分というものは存在していない。
だから彼を認識しなくなったその瞬間。彼はもはやその世界にはいない。

「ちょっと！アイツはどこ！？」「分かんない！」

まばたきほどの一瞬で、敵の姿が消えた。慌てて索敵魔法を使うが反応がない。
そう、彼女らはもう彼の存在を認識できない。

「目標――完全にロストしました。」
やがて無機質な機械音が耳に着けたイヤリング状の情報機器により伝達される
その本部からの情報により、急速に身体に恐怖に似た感情がしみこんでいく。
頭に浮かぶのは任務失敗。
そして失敗の原因はどうみても自分の油断。彼女は唇を噛み、拳

を握り締める。

「あの仮面野郎！絶対捕まえてやるんだから！」

あの男か女か分からない仮面を着けた野郎に今度こそは一泡吹かせてやろうと彼女は決心した。

◇◇◇

「ったく、俺が一体何をしたっていうんだ。」

探し人について訊ねていたはずが、いつのまにかお尋ね者と化した自分の状況に、もはやため息しか出てこない。　仮面を着けたままで人を訊ねるという、どうみても変質者である自分の行動については棚に上げてだが。

重たい足取りで自宅に上がると玄関には自分の物に加え、見覚えのある靴が几帳面に並べられていた。

またかよと思いながらリビングに入ると、部屋の奥のパソコンを見つめていた侵入者が、パイプ椅子を回転させ、こちらに顔を向ける。

それに合わせて黒い髪がたなびいた。

「どうして逃げたんだ？キミならばあんな奴らは一瞬で蹴散らせるだろう？」

表面上嗜めるような言葉を話しているが、話し方からして彼の行

動を特に否定する気はないようだ。

「別に、俺はかったりいのが嫌いだからだよ。」

素っ気なく言い捨てる彼に対してクスクスと紅い瞳を細めて笑う。

「相変わらず優しいねキミは」

「……別にそんなんじゃねぇよ。」

ふてくされた子どものような彼の対応は、余計に相手の笑いを誘うだけだった。

「まあいい。いずれにせよキミがしたいようにすればいいよ。私はキミの相棒だからな。」

妖艶な微笑みで彼女は、秋月夕姫は相棒の仏頂面をした朝倉純一を見つめた。

プロローグ（後書き）

プロローグなんですが、なんでしょうか、とてつもなく意味が分からない（笑）
一応クロスオーバーです。

出会い（前書き）

純一君が主要キャラの一人と出会います。
ただ、純一君と原作キャラとを恋仲にするか否かはまだ未定。

出会い

俺、朝倉純一はこの世界の異分子である。
というのも、この世界に元々いなかったはずの存在だからだ。
そんな戸籍もなく、右も左も分からない俺を救ってくれた彼女、秋月夕姫（あきづきゆうひ）には数えきれないほどの恩がある。
それは金銭的な意味合いでもあるし、精神的な意味合いでもある。

一ヶ月も経つとここでの暮らしになれた純一は、その恩をどうやって返せばいいか悩んでいたところ。

「じゃあ、この人を探すのを手伝ってくれる？」

夕姫から写真と共に伝えられた情報をもとに、バイトの合間に探し人についての調査を始めていた。

「純一君、二番テーブルお願い！」
「わかりました。」

そして今はバイト中だった。従業員の自分からしても人気の喫茶店である。
一度夕姫に薦められ、面接に行った所なんと即採用。
ただ、いきなりホールを一人で任されたときには余りの忙しさに、終わった後足がガクガク震えていた。

「失礼します。こちらケーキセットになります。」

客の約半歩前で一礼。テーブルに乗せる際、ケーキ皿を音をたて

ないよう、そしてセットのコーヒーを溢さないようにする。
単純だからこそ、難しいことである。

とはいえ半年も経つと、大分馴れたもので、客足が遠退いた時の空いた時間の上手い使い方を学んだ。

基本、こういった職業は先手、先手を取ることが重要なので、常に玄関口に気を張ったり等、休憩時間を除くと、意外と気が休まることがないのである。

こんな面倒な仕事を、半年も続けられたのは一重に店長達の人柄の良さだろう。

「お疲れ。今日はもうあがっていいよ。」
「ありがとうございます、士郎さん。」

純一はようやく一息つき、キツく締めたネクタイを緩める。
そして更衣室で着替えを済ませた後、帰宅する前に挨拶しようと店長達を探すと、肩を軽く叩かれた純一はそちらへと振り返る。

「ねえ純一君。今日はウチで食べていかない？」

どうみても母親には見えない若さの女性高町桃子が、ふわふわとした微笑みでたっていた。

「そうですね……今日は遠慮しておきます。」
「どうして、遠慮しなくてもいいのよ？」

一瞬言うかどうか迷ったが、純一は複雑な表情で告げる。
「今日は従兄弟が家に来てるんです……」
「あら、そうなの。」
桃子は残念そうに肩をおろす。
そんな彼女を慰めるかのようなタイミングで、店の扉が開く。
「純一、迎えに来たよ。」
涼やかな表情で、夕姫が髪をたなびかせながら現れた。
「あら夕姫ちゃん。お久しぶり。」
「これは桃子さん。お久しぶりです。」
一応バイトの面接をする際、家族がいないことは伝えており、その分従兄弟である秋月家に、何かと援助してもらっているという風に伝えていた。
「あ、そうだ。夕姫ちゃん。今日はウチでご飯食べていかない？」
「構いませんよ、どうせ帰り道のどこかで食べようと考えていましたから。」
トントン拍子で事が決まっていくことに、純一はなんとなく不安を感じた。

「さあ、食べてどうぞ？」

なぜだか緊張感漂う高町家の食卓。

というのも、美由希が料理をしたからだ。

笑顔でみんなを見守る美由希を対照に高町家、朝倉家、秋月家の面々は暗い表情を隠せていなかった。

正直人を誘うのならばもう少しましな料理を持ってこいと弾劾したいのだが、色々と迷惑をかけている純一としては文句は言えない。

そしてなりより問題なのが、決して食べられないほどまずくないということだ。

衰弱死をするがごとく、少しずつ毒を盛られるがごとく、そんな気分を純一は味わっていた。

ふと気分転換のを目的に、横目で見た夕姫の顔は、珍しいことに超然とした表情が崩れていた。

それに思わず含み笑いをしてしまったことが悪かったのだろう。

「純一、悪いが今日は食欲が湧かないんだ、できれば私の分も食べてくれないか？」

追い討ちをかけられ、純一は気絶することもできず、口の中で繰り広げられるドロドロとした愛憎劇にひたすら耐えた後、脱水症状にかかった犬よろしくだらしなく机に突っ伏していた。

◇◇◇

「はい、純一君。お茶。」
「すみません、士郎さん」

冷えた麦茶で吐き気や何やらを濁流のように流し込む。
熱い飲み物ではなく、冷たい飲み物だということに有り難みを感じつつ、純一はようやく一息ついた。

「桃子さんも意外と人が悪いですね。まさか美由希さんが料理をした時に限って俺達を呼ぶなんて。」

士郎はそれを聞いて豪快に笑う。純一にはそれは空元気のようにも見えた。

「いや、本当はね七時くらいに娘が久しぶりに帰ってくるっていうから、それで美由希が張り切っちゃってね。」
「……美由希さん以外に娘さんがいらしたんですか。」
「純一、その発言は少々失礼じゃないかい？」

純一のつい口からついて出た言葉に、いつの間にか真横から話に加わってきた夕姫にたしなめられる。

「それは……確かに。すみませんでした。」
「いやいや、そういえば純一君には話したことはなかったからね。」

素直に頭を下げる純一に、士郎は思わず動揺しつつ、あの純一にも弱点はあるのだな――と、頭の隅で考えながら話を続ける。

「ちょうど純一君夕姫ちゃんと同じ年の娘でね、」

「ただいまー」
扉の開く音と共に聞こえた明るい声は、どこか聞き覚えがあるような、それは前世で関わりがあるような、そうした複雑な胸中を純一に抱かせた。

「おっ、噂の娘がちょうど帰ってきた。」
「ただいまお父さん。……そこのお二人はどなた？」

息をするのを忘れて目を奪われた。
確かに彼女は類い稀な美少女、いやこの年では美女と呼ぶべきか。
しかしながら美女は正直見慣れていると言っても過言ではない純一がその程度で動揺することはない。
捕らえられたのは強き意志を持つ瞳。
だから、なんなのだろうか――と純一は自問自答する。
時間が止まった純一は置いて、現実は続く。
「バイト生の朝倉純一君と、その従兄弟の秋月夕姫ちゃんだ。」
「初めまして、高町なのはです。」

これから長い付き合いになる二人――いや、×××が出会った瞬間だった。

出会い（後書き）

夕姫の言葉遣いがまったく安定しない。
クールなのか、無愛想なのか。まあ、安定しはじめたらそのうち変更するかも。

解決――そして発展（前書き）

少々展開が急かもしれません。

解決――そして発展

二人は長い廊下を歩いていた。
呼ばれたのはこちらなのに玄関口のスリッパはともかく、労いの言葉も、そして誰からの出迎えもなかった。

場所については配置図等を事前にもらったため、迷うことはともかく、目的地については理解していた。それでも初めて来た場所なのだから案内を付けるくらいは礼儀だと思うのだが。

しかしながらそこで出会うのは、見知らぬ二人を物珍しそうな表情ですれ違い様に横目で眺めてくる傍観者だけだった。

けれども二人はそんな未踏の地や好奇の視線に臆するような可愛い性格はしておらず、むしろ涼しい表情で目的地にむかって練り歩いていた。
「まさか、こんなに早く目的の人物に出会えるとは……な。」

その注目の二人組の一人である純一は、今回の思わぬ偶然に拍子抜けしていた。
先週彼女、高町なのはに出会った際、後から現れた女性がなんと夕姫が探していたその人物と深い関係らしい。
その彼女からなんとかその人物の連絡先を訊ね、アポイントメントを取った所、指定された日時、場所がここだった。

面倒ごとが早く済む事は嬉しいのだが、なにやらそれが尾を引きそうでため息をつく純一に、夕姫は言葉をかける。
「それは純一の人徳じゃないかな？」

「心にもないことを言うなよ……」
「そう？私は純一は優しいと思うけど？」
思いもよらない言葉に純一は一瞬固まる。
「――人徳があるってのは優しいとは全然意味が違うだろ。」
とはいえそんなことは絶対容認したくない純一は、なんとか否定の言葉を返す。
しかしながら相手は一枚上手だった。
「その発言からすると、自分が優しいってことは認める気になったのかな？」
ぐっと言葉につまる純一を見てもなお、怜悧な笑みを崩さない夕姫に、思わず恨めしげな視線をおくる。
「夕姫は……」
「ん？」
「夕姫は性格が悪いな。」
純一の発言に怒ることはなくむしろ、楽しそうに、今ごろ気付いたのかとでも言うように、夕姫は笑う。
「そうだな。」
その笑みは、ずるいと純一は思う。色々と口の中に、心に溜め込んだ言葉や感情の行く先を見失わせてしまったから。
「かったりい」

だから純一はそう呟いた。

やがて二人して口数が少なくなり始めたのは、やはり緊張しているのだろうかと純一は考えつつ、ひたすら足を動かし続け、ついに目的地にたどり着く。

そこで無意識にお互いアイコンタクトを取った自分たちの行動に、純一達は笑いが込み上げてきた。

ひとしきり笑うことによって緊張もほぐれた純一達は、顔を見合せ頷き合う。

「じゃあ、行くか。」

「ああ。さて鬼が出るか蛇が出るか――」

扉の前にして、なんともくだらない夕姫の冗談に純一は苦笑を浮かべる。

「残念ながら人間だよ。僕は。」

ひとりでに開いた扉から、ひどくつまらなそうに否定の言葉が返された。

それだけ言うと背中を見せてまた部屋に戻っていくが、その後ろ姿に二人は逡巡することなく、気負いのない足取りで部屋に入る。

一言で言うと、殺風景な部屋だった。とはいえ、壁一面を覆うほどのパソコン画面など仕事に必要ある道具はあるようだ。

「ようこそふたりとも。僕の仕事部屋へ。」

黒い髪の隙間からのぞく切れ長の瞳を携えた青年、クロノ・ハラ

オウンが二人を迎えた。

◇◇◇

申し訳程度に、部屋の隅にあった椅子を机まで運ぶ間にクロノが煎れてきたコーヒーを、運び込んだ椅子に座って一口飲み、一息ついた夕姫は口を開く。

「どうもお兄さん。5年ぶりくらいかな？」

いきなり爆弾発言を投げ掛ける夕姫に、場が凍りつく。純一は彼と夕姫が面識があったことについて、クロノは彼女の言葉について。やがて二人は平常心を取り戻すと、そのうちこの場で一番の年長者はため息をついて、言葉を返す。

「相変わらず冗談が面白くないな、キミは。」

「そう？では次はもっと面白いものを考えてくるとしよう。」

「やめてくれ……本当に。」

心底いやそうにクロノは眉間にシワを寄せる。

「いや、冗談は抜きにしてもクロノんが養子を取ったことには驚いたよ。」

「養子に取ったのは僕じゃなく母さんなんだが……まあいい。それで？キミがここまで来た理由を教えてくれないか？」

謎の愛称？にも動じず、淡々と話すクロノに夕姫は少し不満足そうに眉をひそめるが、やがていつもの冷ややかな表情に戻り話を始める。

「私の父のこと。」

急に部屋の空気が張り詰めた。

しかし部外者の純一は全く気にしている様子はなかった。

「孝介さんのことか。それで、朝倉純一君――」

「純一でいい。」

「純一は孝介さんのことは知っているのか？」

「いや、全くと言っていいほど知らない。」

だからか、確認のために唐突に視線と言葉を投げ掛けるクロノだったが、純一は特段に焦ることはなく、ただ無知という事実を述べる。

全く事情を知らないにも関わらず、この場で平然としている純一に感心と呆れが混じった感情を抱きつつ、孝介のことを話すか否かを夕姫に目で答えを求める。

「いいよ、だからわざわざ純一を呼んだんだ。それに純一は私の相棒だからね。」

自分の言葉に呆気に取られているクロノや、恥ずかしそうに目を伏せている純一に、自然と夕姫の口元がゆるむ。

「意外かい？」

「……正直に言ってな。キミは誰かに頼るような性格ではなかったからな。」

「自分は天才なんだと思っているような、痛々しい子供から成長したんだよ。」

肩を竦める夕姫を見て、自分の知らない彼女の過去に幾分かの興味を覚える純一だったが、それは今でなくとも構わない話だと、即座に頭から切り捨てる。

それにそのような考えは姿勢を整えたクロノから発せられた言葉によってすぐに霧散した。

「結論からすると、孝介さんは行方不明となっている。」

解決――そして発展（後書き）

クロノ君登場。仕事部屋が原作と異なるのはご愛嬌。また、クロノ君自身も設定がかなり異なります。（決して扱いが悪いわけではありません）

動揺（前書き）

またしても安定しない夕姫の言葉。

動揺

人間は葦である。しかしそれは考える葦である
有名な哲学者、パスカルの言葉である。
この言葉は人間は最も弱い存在であるが、考える葦である。つまり、ひとたび風が吹くとすぐに曲がってしまう――しかしながら風がやむとまたいつもの姿に戻るのである。
要するに、自然界で弱者である人間は、精神を持つことで、力を無自覚に奮う風よりも、優れた存在である――ということだ。

「だから今回もこの場を知恵を振り絞ってなんとか切り抜けてみせる！」
「何少年マンガみたいなセリフを言ってんのよ。それと今度こそ逃がさないわよ？」

言葉とは裏腹に既に息巻いていたり、所々の所作が必死な金髪の女子を思わず睥睨していた純一は、自らの不幸を嘆いていた。
というか行く先々で毎回この女に会うのは、心労もしくは多大なストレスが溜まるため、いい加減勘弁してほしいものだった。

「なぜ俺をわざわざ追いかけるんだ、ファンやストーカーじゃあるまいし」
「それは任務に決まって――って！何言わせるのよ！」
「お前が勝手に自滅しただけだが。」

猫が毛を逆立てて威嚇するように、一見杖にしては、やけにメタリックな先端部をこちらに突き付けられた。
しかし純一は一触即発な自分の身を顧みず、思考の渦に入り込ん

でいた。

（任務か、なにやら厄介なことになっているようだし……仕方ない、今日はこの辺にしておくか。）

そう心に決めた純一は、すでに術式は完成していたので、とりあえず見当違いなことで憤慨している女を無視してここから逃げ出す事にした。

「だからあんたは……って、またいないし！」

今回は前と違って、この足りない女一人だったので、術式の完成が簡単だった。

あたふたしている彼女を眺めるのも一興だが、伏兵がもし居た場合を考えると、この場に留まることはあまりよろしくない。

「これはね、手品みたいなものなんだ」

彼女を見ていて、ふと頭に浮かんだ言葉に純一は苦笑する。

「じゃあ、おれは詐欺師かな」

自分の手のひらを眺めた後、自嘲気味に純一は呟いた。

◇◇◇

「そっか、行方不明なのか」

クロノの言葉を聞いた夕姫の横顔は、諦観というより冷淡、不安よりは安堵。

まるでそれは、今はまだ会わなくて、会えなくてよかったかのように純一には感じられた。

張り詰めた場を取り成すように、それぞれカップに口をつける。

やがて気持ちの整理がついたのか、夕姫が口を開く。

「それとなく示唆されていたからそこまで驚きはしなかったけど……でもクロノんが知らないとなると困ったね」

一瞬呼び名に不快そうに眉を詰めるが、すぐに平静を取り戻す。

「――ほかに、僕以外の情報は残していなかったのか？」

「手がかり……か。余り無いに等しいかな」

「微妙な答えだな、でも何かしらの方法はあると」

「一応ね。でも今は、とりあえず純一に手伝ってもらうしかないかな」

唐突に振られた純一は、今度こそ動揺していた。

「……俺かよ」

「構わないよね、純一」

「いや……まあいいけどな」

「いいのか？」

殊更意外そうに、クロノは苦い顔をした純一の横顔を見つめる。

「夕姫にはなにかと借りがあるし、それを返すための唯一の方法だからな。やるしかないだろ」

虚を突かれたのか、夕姫は表情を強ばらせる。が、ゆっくりとそれがほころぶ。

「そうか、頼りにしているぞ」
「いや夕姫。当然お前も手伝えよな？」
「まあぼちぼちかな」
「どっちなんだよ」

二人の息の合ったやり取りにクロノは苦笑を浮かべつつも、どこか嬉しそうにしていた。

ノックの音が、そのゆるんだ場に再び緊張感を取り戻させた。

「お兄ちゃん、入ってもいい？」

凛々しくもどこか甘えたような声色の言葉に拍子抜けした後、二人はニヤニヤとした表情で、羞恥に頬を赤くした当事者を見る。

剣呑な目付きになりながらも、律儀に二人に合図を、この部屋に今部外者が入ってもいいか求める辺りが、彼の人の良さと付け込みやすさを感じさせる。

返答の代わりの相槌を確認したクロノは、妹に声をかける。

「いいよ入って」
「お邪魔しまーす――」
「よ、邪魔してるぞ」
「三日ぶりですね」

純一と夕姫という彼女、フェイト・ハラオウンの物語にとっての部外者に、笑顔が不自然に固まる。
彼女のいびつな笑顔から察するに、よもやクロノ以外に人がいると思っていなかったのだろう。

次いで彼の兄同様、頬を赤くしたのは甘えた声を聞かれたからだろう。

「へー……お兄ちゃんね。中々に可愛い呼ばれ方じゃないの」
「本当。でもまあクロノんらしいかも」

やはりというか、そのような彼女は二人の恰好の的となった。

動揺（後書き）

フェイトはこの作品ではお兄ちゃんっ子です。

日常の隙間（前書き）

純一君の暇な日の過ごし方でございます。

日常の隙間

自分のことを、誰かに寸分狂わず正確に伝えることは想像以上に難しいものである。

何故なら第一印象で、おおよその人間はその人物に対するイメージ像が固まってしまうからだ。

だからもしその印象を崩そうと考えた場合、長い間その人物と時間を過ごす。もしくは、最初に相手が抱いた第一印象より、更に強い印象を、新たに与えなくてはいけないのである。

つまるところ想像に比べてよほど突飛な性格でない限り、会ったばかりで、間違った見識を抱かせた相手に本当の自分を伝えることはほぼ不可能なのである。

「ですから、俺は家無き子でもホームレスでもありません！」

「ではなんで君みたいな若い子が、こんな真っ昼間にベンチの上で寝ているんだ？」

「何故っ――て？　そりゃこんな天気の良い日に暖かい場所と来たら、昼寝するしかないでしょう？」

だからこそこの会話はいつまで経っても平行線なのだろうかと、純一は嘆かわしい気持ちを抱く。

こうして、平日の午前十時頃。公園のベンチでうたた寝をしていただけで、ホームレスと勘違いされてしまう。その考え方は、あまりにも短絡的で、自己本位で、理解し難い――と純一は思う。

しかしながら部外者の立場から見たとしても、どうみても明らかに朝倉純一の行動は異端であり、奇異であった。
よってこの警官は、誉められるのはあってこそ、責められる要素は皆無なのである。

「……普通君らの年代ならば、こういった日には友人達と一緒に遊んだりするのではないのか？」
「そうですか？」

けれどもやはり普通の感性からはほど遠い純一は、その発言に毛ほども共感も納得も出来ず、不思議そうに首をかしげる。
自分では理解出来ない純一の行動、考えに眉をひそめていたが、ふと何か気付いたのか、勘違いしたのか、暖かい視線で純一を見つめ始める。

「あー……そうか。眠りをさまだけてしまって悪かったね、それじゃあ」
どうやら純一の行動に対してのなにかしらの結論を見いだしたらしく、問題はあるにはあるがそれは個人的なものだろうからと、納得した後去っていった。

「……なんだったんだ？」

「あんたが可哀想な奴だと認識して、放っておこうと判断したんでしょ？」

返るとは思っていなかった独り言に対しての呆れたような返事に、驚くより先に失礼な――と思いつつ、純一は顔をあげる。

実直にして直情。そして馬鹿っぽいというのが、金髪碧眼の彼女に対してのファーストインプレッションだった。

「私もここに座ってもいい？」

「いや、ここは別に私有地じゃないから、俺の許可取らなくても構わないのだが」

「そう？　じゃあお構い無く」

わざわざ純一が元いたベンチに長い足を組みながら座る彼女を苦々しい表情で見やり、仕方ないなと純一は隣のベンチに移動し、そこで再度横になり、目を瞑る。

「……」

「……」

「……あのさ、こんな美少女がいるのに何で寝るわけ？　おかしいでしょう？」

「……」

「あんたに言ってんのよ！」

耳元で叫ばれては流石に無視するわけにはいかず、純一はハウリングする頭に顔をしかめつつ、渋々起き上がる。

「……何だよ、可哀想な奴の相手なんかしなくていいだろうが」

「……けっこう根に持つタイプみたいね、アンタは」

「いや、弄りがいのある奴を弄ってるだけだ」

「なんですって！？」

（こういうすぐにむきになるところが弄りがいのある一因なんだが。

まあ、恐らくそれが彼女の性分だろうから、改善するのは難しいだろうな）

ため息を一つ。怒りを顕にし、威嚇する彼女を細くした視界で捕らえて、純一は訊ねる。

「で、何か？　起こしたからには話があるんだろ？」
「え？　いや、その――」
「……何もないのに人の睡眠を邪魔するなんて……最低だな、お前」
「な、何よ！　なんで初対面にそんなことを言われなくちゃいけないのよ！」
「事実そうだから」

冷静に、冷たくあしらう。別にこうした女が嫌いというわけではないのだが、なんというかこう、嗜虐心を妙にくすぐられる女だから仕方ない。

（ああなるほど、さっきの警官も恐らくこうした心境だったのだろう。それなら仕方ないな）

そう考えるとやはり自分も普通の人間の一人じゃないかと、純一は思わず一人歓喜する。

「……待ちなさいよ、なに勝手に納得してるのよ！　私はね――」
「ストップ。何を言おうとしているんだ？」
「お姉さま！？」

彼女の発言に被せるように現れた闖入者は、女性にしては随分と

背が高く純一と同程度だった。
また原因はそれだけではないのだが、どうやら彼女に圧倒されていた純一は、知らずのうちに唾を飲み込んでいた。
何故だか不気味なほど早く刻む鼓動に驚きつつ、緊張した面持ちで二人のやり取りを純一は見つめる。
繰り広げられるのは、何かオイタをしたらしい妹分に向かっていくつか小言を言い、従順に頷く彼女の様子にどこか疲れたようにため息を吐く様。
その後、飼い犬の粗相を謝罪するかのように、こちらに向かい苦笑をみせる。
腰まで伸びた黒い髪は髪先から根元まで艶やかで、彼女の透き通るような白い肌や目を見張るような美貌も相まって、どこか精巧な人形を鑑賞しているような気持ちを純一に抱かせた。
だがそれ以上に感じていたのは、既知感――だった。

◇◇◇

「じゃあここで二人は待ち合わせをしていたということか？」
「ええ」

気まずくなった間を埋めるべく、お詫びということで頂いた缶コーヒーのブラックをちびちびと飲む。
見栄を張った結果のブラックは、正直まずい。
「……やっぱり私のコーラとアンタのコーヒー交換しようか？」
「けっこうだ」
意地という名のメッキはコーヒーの苦味によって簡単剥がれ落ちて、またそれを見兼ねてか妹分から労るような提案が来る。
しかし、意地も突き通せば事実と成り代わる。そう思い純一は、コーヒーを粉薬を飲むかのように一気に喉に流し込む。
そも、姉御はコーヒーは妹分、コーラが純一と考えていたらしいのだが、純一の、男がコーヒーなんだ……とつまらないプライドが邪魔して、今の状況に如実に現われているのだった。
というより、子供っぽいこの妹分がブラックが飲めて、自分が飲めないはずはないという行動は、明らかに背伸びしたがっている子供にしか見えないということを、純一は気付いているのだろうか。
「まあ男が意地を張っているときは、気付かないふりをして、何も言わずに黙って見てるのが、いい女のあかしですよね」
年齢的にも精神的にも一番の大人である彼女は、なんとも微笑ましい二人のやり取りに口を挟むことなく、ただただ眺めていた。

日常の隙間（後書き）

衝動のまま新キャラを出してしまった。この先きちんとキャラに肉付け出来るかが心配です。

お名前は？（前書き）

自己紹介は大事です。

お名前は？

「そういや言ってなかったな……」

いつだって彼は唐突だった。

ポンと手をたたいたと思うと、彼は頭を下げ、呆然としている二人に告げる。

「朝倉純一です」

涼やかな風吹く公園のベンチの傍らで、純一が発した言葉に二人は困惑した表情で互いを、そして純一を見る。

「いや、だから自己紹介。俺の名前は朝倉純一。あんた等の名前は？」

二人は純一の行動に納得したのか、ああと声をもらす。

「朝倉純一君か……いい名前ね」

「まあな」

尊大な純一の態度が不満なのか、一人はつまらなそうに鼻を鳴らした。ただ片方はそれがツボに入ったようで軽く微笑んでいた。

「ところで純一君、君に妹さんはいる？」「――え？」

その質問は自分の隙間を抉られたような、そんな気持ちを純一に抱かせた。

「いやそりゃあ。その……」

即座に浮かぶ、「そんなものはいない」と否定する言葉は何故だか形にならなかった。

「いない……いないはずだ。俺は、俺は――」

そうすると、今の日常が、今まで培っていた『朝倉純一』という存在が、壊れてしまいそうと感じてしまったから。

口をパクパクと動かす純一の情けない様を笑う傍ら、興味深そうな表情で、食い入るように彼を見つめる女性もいた。

その冷たく、まるで何か観察するかのような視線を純一から外した彼女は、俯いたままぼそりとつぶやく。

「……どうやら、少しずつですが事態は進んでいるようですね」

それは喜んでいるのに泣いているようで、なんだか強がっている子供のように思えて。それが気になって仕方ないから。

純一は先ほどの質問を、自分のことなんて忘れて訊ねる。

「どうか、したのか？」

「いえ、なんでも。……そうですね、私はですね――」

軽く首を振り、一呼吸置いた後、彼女は黒い髪をなびかせながらどこか儚げにほほえむ。

それはやはり純一には誰かと重なっているように見えて――

「凪です。」

その一言を言い残し、凪は去っていった。

後に残るのは置いてきぼりにされ、すぐさまその後ろ姿へと駆ける彼女と、改めて胸に去来する既知感を抱く純一のみだった。

◇◇◇

「キミ達に新たな任務を頼みたい」

急な呼び出しの末、新たな任務。正直この場に集まった人物達は、困惑や動揺を隠せなかった。　とはいえ上司にそう言われた際部下の身としては、何かしらの不服があったとしても、全てを肯定するほか道はない。

「……忙しいのはわかっている。が、これは僕の私的な任務に近いから悪いけどキミ達に頼むしかないのさ」

それからの取って付けられたような一言に、苦笑を浮かべる者がいた。

「随分悪どいやっちゃな、クロノ提督。弱味があるウチとしては受けなくちゃいけへんやん」

やれやれと首を振り、八神はやてはそう了承する。

「はやて、本当にいいの？」

隣で佇む長い付き合いである彼女、フェイトはブラコンであるからこうした頼みごとを断ることはないだろう。

だからこそ彼女は確認しているのだろう。

私は彼の、兄のためだから引き受けるけれども、はやてにはそうしたメリットはないんだよと。

「かまやへん。部下の育成に忙しい二人に比べりゃへっちゃらや」

「そんなこと――」

「ああわかっとるわかっとる。わざわざ言わんでもええ。それで？今回の任務はどの程度制限すればええん？」

これはほぼ確定事項というか、彼女達に取って任務の際の決まり文句みたいなものであった。

常人の何倍もの力を持っている彼女達は、諸刃の剣としても扱われている。

その力を開放するということはよほどの場合でなくてはあり得ないのだから。

いや、過去に一回だけだがそうした事態があったなと思い起こすのと同時に、チクリと胸に突き刺さる傷みをはやては再び思い出す。

「いや、今回は制限はない。久方ぶりに本当の意味で全力を出して

くれ」
「……どういうこと？」
今まで何故だか口を開かなかった彼女、高町なのはが部屋に入った時からの堅い表情を更に堅くして、同じく気難しそうにしているクロノに訊ねる。
それから数秒悩む素振りを見せた後、彼は話す。
「今回の敵対する相手が――クライアント。対魔法使い達だからだ」
その言葉に、その場にいた全員の顔に緊張がはしる。
「……それは、本当なん？」
先ほどの言葉からやはりと思いつつも、強い衝撃を受けていたことは隠せなかった。
恐らく二人も同じだろうと周りを見ると、二人して酷く青ざめた顔をしていた。そういう自分もそうなのだろうが。
そして三人の視線が自然とクロノの整った顔に集まる。　三人に共通しているであろう否定の願いは、彼の無言の首肯によって粉々に砕かれる。
そうして土気色の顔をした彼女らが思い出すのは、一年前の惨劇。自分たちの無力を思い知らされたあの事件だった。

やがて場を取り成すように咳払いをクロノが行うことで、彼女達の思考が過去から現代に戻る。
そこではやては自身から放つ鈍い痛みに気付き、そこへ視線を向ける。
無意識の内に握り締めていたらしい手のひらの隙間から、ポタポタと血が床へと滴り落ちていた。

後で拭いておかなきゃと頭の片隅で考えながら、クロノの言葉を待つ。

「……それで今回君達に頼みたいのは、未来師である秋月孝介の奪還だ」

お名前は？（後書き）

急すぎる展開。もう少し日常を書くべきでしたと今更ながらに後悔。
いや、まだこの時点なら大丈夫かな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9053w/

クライアント

2011年11月25日00時01分発行